平成二十五年六月十日発行
皇學館論叢第四十六巻第三号　抜刷

研究ノート

丹羽文雄と浄土真宗

――罪と救済について――

河合重好

皇學館論叢　第四十六巻第三号
平成二十五年六月十日

研究ノート

丹羽文雄と浄土真宗

――罪と救済について――

河合重好

□ 要　旨

罪を犯し、後年になって、自責の念に苦しむ人間は、仏教信仰に専念することによって救われることができるのかという命題を選び、宗教小説の第一人者といわれる丹羽文雄の六作品での描写を対象に考察を試みた。このテーマは、筆者自身の人生体験からの願望[1]でもあり、上記の文学作品での作者の宗教観をはじめ、各種の宗教書や注釈書の言説を含め、探究を行った。また、宗教書としては、「救いの宗教」といわれ、初めて、現世での往生を説いた唯一の宗派である浄土真宗の他力本願の思想を中心に、具体的には、代表的経典である「歎異抄」の引用例をもとに救済論を調べた。その結果、筆者が求める「肌で感じる救いの境地」を実感できるようになるには、どのような精神的努力をすれば、達成されるのかという点に関しては、具体的な論述には遭遇できず、管見ではあるが、そもそも仏教信仰そのものに、自責感からの解放を期待するのは不可能であるとの感触に到達した。

□ キーワード

丹羽文雄・浄土真宗・他力本願・自責の念からの解放・現世往生

はじめに

本稿は、丹羽文雄の数多い作品の中から、「浄土真宗もの」といわれる六作品（「青麦」、「菩提樹」、「有情」、「一路」、「肉親賦」、「無慚無愧」）を選択し、この中に描かれている登場人物の男女の愛欲を主題とした倫理的（道徳的）な罪やその背景について、作品間の類似性や差異性を分析するとともに、作品の随所にみられる親鸞の「罪の救済」についての宗教的教義（浄土真宗の根本思想である他力本願）がどのように引用されているかを明確にすることによって、親鸞思想と作者の宗教観との関係を明らかにすべく考察を試みたものである。

一　あらすじと類似性

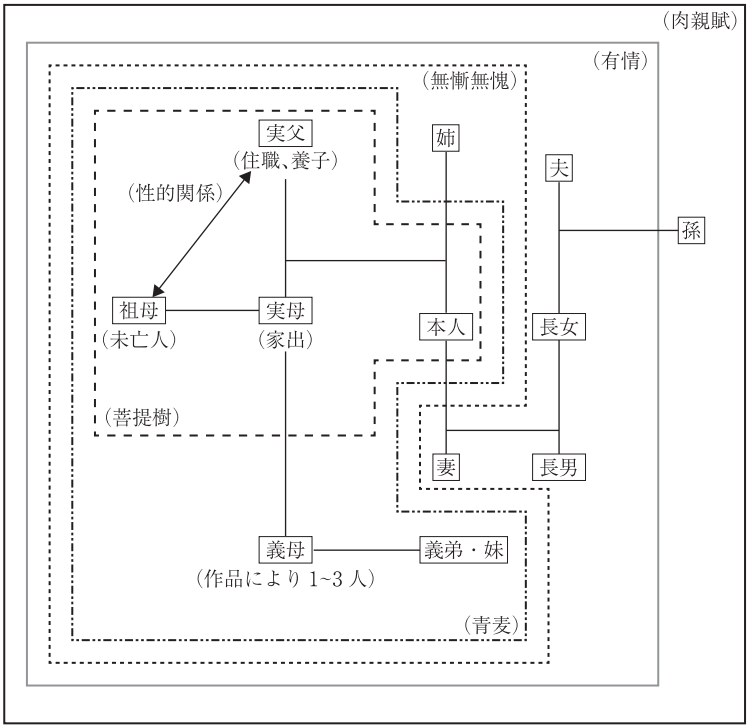
六作品の発表年、発表時の作者の年齢およびあらすじを表―1に示す。その時代背景は、昭和二八～四五年の十七年間になっているが、作品の時代背景は、必ずしも発表年代の順序とは、一致しておらず、明治～大正時代の「無慚無愧」から昭和四〇年代前半の「肉親賦」まで、かなり長期に及ぶ時代が、これらの作品の舞台となっている。戦後、日本は、驚異的な復興を果たし、国民生活は大きな変貌を遂げた。そして女性の社会的立場においても、戦前の「家制度」の廃止、女性の参政権の獲得、男女の教育機会の均等化など画期的な改革がなされたが、これらの作品の扱う時代にあっては、まだまだ、女性の自立には、ほど遠く、奔放な性風俗が描かれているが、女は男の従属的存在（暴君に仕える妾とか、後継ぎを残して婚家を追放される妻など）といった男尊女卑の社会風潮の色濃い模様が作品の随所に窺われる。

また、作品の舞台となっている登場人物の家族構成には、図―1、および図―2に、示したように、きわめて強い類似性がある。いずれも住職の家庭を対象としたものであり、このうち、五作品については、養子に入った僧侶と未亡人の祖母（僧侶からみて義母）との性的交渉を中心に、そこで織りなす非倫理的、非道徳的な男女の愛欲を扱っており、それがもとで、引き起こされる肉親間の愛憎がテーマとなっている。また、他の一作品（「一路」）については、作品の舞台や家族構成は、近似しているが、ここでは、夫の単身赴任中に、院代との不義から出生した娘と同母の兄との近親相姦と、その悲劇（娘の自殺）を扱っている。

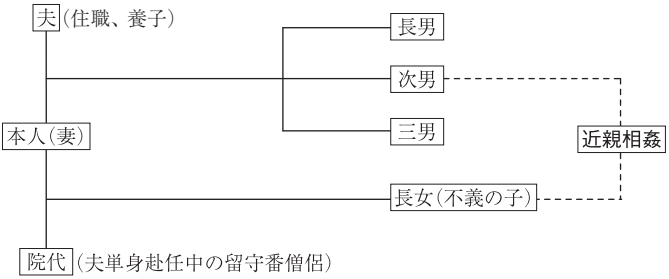
表－１　６作品の発表年代順と時代背景

	作品名	発表年	作者の年齢	あらすじ ［作品の舞台となっている時代］
1	青麦	昭和28年（1953）	49歳	母と娘の女所帯のお寺に養子として入った僧侶（以下の作品も同じ）が、義母だけではなく、次から、次へと寺に出入りする女性と性交渉をもち、妻を家出させ、後妻を苦しめさせながらも、煩悩（性的欲求）から脱却できない男の生涯（70歳）を描写している。 ［昭和初期～20年頃］
2	菩提樹	昭和30年（1955）	51歳	僧侶でありながら、自分の気の弱さから、性的欲求の強い義母に抗しきれず、その娘との結婚後も、ずるずると関係を続け、その苦痛から妻を家出させてしまったことへの罪や妾生活から脱せない女性の姿を描写している。 ［昭和10年～30年頃］
3	有情	昭和37年（1962）	58歳	アメリカに留学している長男の国際結婚に猛反対する僧侶夫婦の姿を通し、自分がかつて親や檀家の期待を裏切り、廃嫡の道を選んだことを想起し、親子の断絶をテーマに「因果応報」を示唆している。 ［昭和20年～30年頃］
4	一路	昭和41年（1966）	62歳	夫の単身赴任中に妊娠した、院代との間の不義の子（娘）が出生の秘密（出産直後に養女として出された）を知らないまま、近親相姦で、次男（同母異父）の子を宿し、それを知った娘が自殺する姿を通し、母親の罪を描写している。 ［大正～昭和20年頃］
5	肉親賦	昭和44年（1969）	65歳	実母の家出を不純なものと嫌悪し、その反発からアメリカへ集団結婚した姉が、後年になって、それが誤解であったことを知り、もはや取り返しのつかない68年間の人生を悔恨する姿を描写している。 ［昭和40年代前半］
6	無慚無愧（むざんむき）	昭和45年（1970）	66歳	不義の発覚により、２度の結婚とも、後継ぎの子供から引き離され、追放された過去をもつ祖母は、ここでも、自分の性的欲求を満たすため、娘の夫（養子に入った僧侶）と関係をもち、それを続けるため、娘とその子供を切り離して、寺院から追放してしまったことを後年になって後悔する祖母の悔恨を描写している。 ［明治～大正時代］

図－１　［作品の家族構成］（「一路」を除く）



図－２　［作品の家族構成］（「一路」の場合）



そして、これらの作品は、自伝的小説といわれるように、丹羽文雄自身の「おいたち」と深いつながりが見られ、彼自身が浄土真宗の寺院に生まれ、養子に入った実父と祖母との不倫関係や実母の家出を体験している。

二　宗教的教義

作品の随所に引用されている宗教的教義（仏典）を表―2に示す。すべて親鸞の自著を中心にしているが、作品間でかなりの濃淡がみられ、全く引用のない「肉親賦」から、七つの引用を使っている「菩提樹」まで幅が広い。そして、作品を横断的に比較すると、「歎異鈔」が四作品に引用されており、一番多い。ここでは、「歎異鈔」[2]を対象に、具体的な引用例を述べる。

引用例

（一）性的欲求の強い義母は、養子が娘の婿になったあとも、深夜、僧侶の部屋を訪れ、性交渉を求める一方、檀家の老婆たちを集め、歎異鈔の一部「現世への執着が断ち難い。そういう煩悩こそが救いの道である」を引用し、人間の業の深さを説教する。（菩提樹）

表－２　作品別教義の引用比較　［引用教義を○で示す］

	教義名（著者）［アイウエオ順］	作品名					
		青麦	菩提樹	有情	一路	肉親賦	無慚無愧
①	一念多念証文（親鸞）	○					
②	一枚起請文（法然「親鸞の師匠」）		○				
③	教行信証（親鸞）		○				
④	口伝鈔（覚如「親鸞の曾孫」）	○					
⑤	正像末和讃（愚禿悲歎述懐）（親鸞）		○	○	○		
⑥	歎異鈔（唯円「親鸞の弟子」）		○	○	○		○
⑦	大蔵経（相応部）（佛教典籍の総集）		○				
⑧	末燈鈔（自然法爾）（従覚「覚如の次男」）	○	○				
⑨	唯信鈔（聖覚「親鸞の法友」）		○				

（二）僧侶と檀家の未亡人（三十二歳、実業家の妾）との恋愛関係が芽生え、愛を告白しあう仲となるにつれ、僧侶は、次第に、義母との性交渉を敬遠するようになる。初めての未亡人との逢引の約束ができ、二人は、海辺の旅館で激しい抱擁を交わす。僧侶は、人のもの（妾）を奪う罪悪感に苦しみながらも、期待感でふくらみ、ほのぼのとあたたかくなる。私はひたすら現世のよろこびを求めていますと自認し、歎異鈔の一節を思い出す[3]

「なにごとも、こころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといわんに、すなわちころすべし。しかれども一人にてもかなないぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこころのよくてころさぬにはあらず、また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし・・・・」

未亡人（妾）は、僧侶への恋慕の気持を秘めながら、相手の男に対し、必死になって、別れてほしいと懇願する。男は「何を寝ぼけたことを言っているんだ」と一蹴する。本気でそう言うのなら、「相手の男は誰だ」と執拗に聞かれる。しかし、秘められた関係にある僧侶の名前は口にできない。突然、抱きすくめられ、最後まで抵抗できずに、身をまかせてしまう。「理由のない青臭いことを言うな」と、捨て台詞を残して、男は帰っていく。一人になって、未亡人は、自分の業（善悪の業は因果の道理によって後に必ずその結果を生む）のふかさをしみじみ感じる。

誰もが、その人自身の業によって構成されているものである。男とめぐり合ったのも、業の仕業であれば、僧侶を知ったのも、また業の仕業であった。僧侶を知ったがために男と別れようとあせり出したのも、たしかに業の仕業である。

（菩提樹）

（三）僧侶の息子は、「実母が家出の後、後妻になったり、内縁関係になったり、妾になったり、旅館の女中になったり、次第に下品なあさましい人間に転落していった。あやまりの一生は、それがあくどくあればあるほど救われる条件にかなっている。悪人正機説を知らなかったら、実母を軽蔑し、嫌悪し、恨み続けたであろう。今では、感謝の気持すらもっている。親鸞に教えられたのだ」と回想する。

（有情）

（四）実母は、夫の単身赴任中の代行として寺に住み込んだ若い僧侶（院代）と性的関係をもち、妊娠してしまう。夫の帰りを知り、告白と夫の裁きについて、真剣に考える。そして、告白を間近にひかえ、思い余ったときの最後のよりどころとし

て、歎異鈔の一節を酔っているように、繰り返し読む。[4]

「親鸞にをきてはただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。惣じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆゑは、自余の行もはげみ、仏になるべかりける身が、念仏をまうして、地獄におちてさふらはばこそ、すかされたてまつりといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし……」

冷静に告白を受けた夫は、何日も考えた末、世間には、死産として、女児は養子に出す。（一路）

（五）二度の結婚（いずれも、不義が発覚し、後継ぎの子供から引き離され、追放される）の後、寺院へ嫁いできた祖母は、先夫の死後、ここでも、若い養子と性交渉をもつ。その独占欲のため、養子の嫁になっている、わが娘（実母）を子供から引き離して追放する。養子の再婚が話題となり、檀家の要請により、二〇年近い秘密に思いを馳せながら、祖母は別居を余儀なくされ、僧侶や檀家を恨みながら、隠居所で老婆たちを相手に、細々と法話を聞かせる生活に入る。[5]

「弥陀の誓願不思議にたすけまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひたつ心のおこるとき、すなはち摂取不捨の利益ににあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。そのゆゑは罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに悪をもおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと云々」

隠居所での娘（実母）と孫の久しぶりに再会し、抱き合って泣く姿を見て、祖母は号泣しながら、自分は無慚無愧の極悪人だと思い、「責めないでくれ」と這いずりまわる。（無慚無愧）

考　察

（一）救済論

先ず、最初に最も強調されていることは、徹底的に人間を「悪人」として扱っていることである。なお、ここでいう悪

人とは、殺人や強盗をはたらく、極悪非道の人間をさすのではなく、「ふつうの人間らしい欲望をもち、人間らしい欲望をすてきれない人」であると定義している。ここでは、善人と賢人といえども、それは見せかけに過ぎず、内心は、悪の塊り（悪性）で形成されており、その原因は、人間の本質として、貪瞋痴（とんじんち）の三毒を根とする煩悩のなせるわざであり、これを断つことができないためであるとしている。これは、浄土真宗の根本的思想であり、親鸞は八六歳の晩年になっても、自分が救い難い悪人であることを告白した「愚禿悲歎述懐」の文言を残している。そして、これがもとになって、「人間は罪を犯さずには生きられない存在である」と述べている。また、すべての人間は、自分を含めて、悪人であるという認識に立つことは、ある意味、一種の安心感（罪意識の緩和）を与えてくれると同時に、他人に対する寛容性（とりわけ憎悪に対して）の増大につながるのではなかろうか。この点、「有情」の中でも、「悪人正機説を知ったから、寛大な気持になれたが、もし知らなかったら、実母を軽蔑し、嫌悪し、恨み続けたであろう」と描写している。このことは、現代の人間社会においても、十分通用する説得性をもっており、浄土真宗の存在意義の一端が感じられる。

次に、救いの道に入るためには、何よりも、自分がいかに悪人であるかということを自覚することを絶対条件としている。このことを最も具体的に述べているのは、「無慚無愧」の文脈である。ここでは、先ず、徹底的に内心の罪を自覚するという「開眼」が求められ、おのれがおのれの告発人となって、情け容赦なく、今まで見えなかった心の罪が見えるようになるまで、みつめることが必要であると説いている。その上で、これが一番難行であると思われるが、「理性の中での罪悪感の中で、もがいている限り、救いは得られず、この理性という領域内を抜け出さない限り救いはない」と説いている。そこに、他力の要請があり、懺悔が生れるというのである。「懺悔とは、罪を告白し、ゆるしを請うためではない。それは、自分の力では越えられないものがあることを告発することである。倫理の葛藤や、善悪の観念でとらえているが、宗教の世界は、本来、善にも悪にもかかわらぬものである」と説いている。ここでの理性の領域を脱し、他力に頼るという文脈は、かなり難解である。

そして、「救いを得るための、唯一の実践的方法としては、ひたすら念仏心を起こすことであり、自分が悪人であるという自覚にたった念仏は、仏そのものであり、もはや自分が唱えているのではなく、阿弥陀仏、が念仏者の口を通してあらわれているのである」と説いている。ここに、他力念仏の真

髄である絶対無条件の他力の救いが描写されており、念仏者は、「あるがままの自分の欲求とあるがままな自力の分別に従って、そういう生き方をする自分を、そういう生き方しかできない自分をそっくり如来のはからいにあずけ放しにすればよい」としている。そして、「念仏者は、如来の救いは、それを信じようと、信じまいと、すでにとっくの昔にできあがっており、すでに救われているのだという事実に気がつきさえすればよい」と述べている。さらに、「ありのままな自然、人間的な自然のままに生きていくそのことが、如来の指図によるものであり、仏と一体になって生きているという自覚をもつことであり、そうすれば、まちがいのない生き方、安心しきった生き方ができるという信頼感が生まれる」としている。しかし、はたして、ここで描写されているような展開により、「救いの事実」を実感することができるだろうかということには、疑問がないわけではない。「菩提樹」の中で、僧侶と檀家の男との間で交わされた「人間は救われるものと思いますか」という会話では、僧侶が、「私にも判りません」、「誰に人間の救いの保証ができましょう」と答えて、「一切を委ねるのがよいと判っていても、私は、まだまだ捨身になれない、聖人の教えに対して、心を労することが足りないと告白しているところが、筆者として気になるところである。

(二) 運命論（宿命論）

一方、「有情」の中では、「仏教論」とは別に、「運命論（宿命論）」についても描写されている。これは、作者の意図として、何を意味するのであろうか。仏教論（宿業論）との接点をどのように解釈すればよいのだろうか。作者自身が敬虔な仏教徒ではなかったということであろうか。それは、「内在的意思」と呼ばれるもので、ここでは、「この世には、手の出しようのない途方もない大きな力があり、それで人間があやつられており、抵抗のしようがない」と描写し、それによって、「人間の優劣や外見の美醜が支配され、人間界に不公平を生じさせている。もし、この宿命論が決定的なものならば、念仏も懺悔も無意味になってしまい、勝手にしてくれというほかない」と述べている。

作者は、登場人物の口を通して、「この世には人間の力を絶した、ある偉大なものが働いていると考えていたのはまちがいではなかった」と述べている。この文脈は、作者が仏教的救済論に対して、懐疑的であったことが窺われる。

まとめ

以上、「浄土真宗もの」といわれる丹羽文雄の六作品のうち、最も引用例の多い歎異抄を対象に、作品中の登場人物の「罪の救済」について、宗教的教義がどのように展開されているかを検証し、作家丹羽文雄の宗教観をみてきた。その内容に対する筆者の率直な印象は、「救いの宗教」として、最も重要な命題である救済の論理の描写に関し、作品間の一貫性に疑問を感じるなど、必ずしも同調できるものばかりではなかった。たとえば、前述のように、「無慚無愧」では、徹底的に内心の罪を自覚し、理性の枠を超えて、念仏を称えれば、救われると説いている一方、「菩提樹」では、僧侶と檀家の男との談義の中では、「人間は救われると思いますか」との問いに対して、「誰に人間の救いの保証ができましょう」と答えて、救いに対して、懐疑的な扱いとなっている。また、「有情」では、宗教との対立概念である「宿命論」を紹介し、「この宿命論が決定的なものならば、仏も懺悔も無意味になってしまい、勝手にしてくれというほかない」と述べており、宗教による救いを放棄する文脈となっている。このような差異性がみられることから、「作家論」や「作品論」より、むしろ「救済論」を求める筆者にとっては、甚だ、不満足な内容のものと受け取られた。しかしながら、同時に、人間を、徹底的に悪人視することを原点におく、思想には、多くの教訓が含まれており、筆者の人生観に多くの示唆を与えてくれたことは否めない。

最後に、今までの調査結果から到達した、現在の筆者なりの見解を述べて結びの言葉としたい。

本稿の主テーマである「罪の救済」に関しては、過去数年にわたり、唯一、現世での往生（現生正定聚の境地）を説いた浄土真宗の教義を中心に、宗教書や注釈書、評論などを中心に追求を試みてきた。しかしながら、その内容は、概して、抽象的、観念的なものであり、残念ながら、筆者が求める安心立命の心的境地とは、実感として肌で感じることができるのか、自責の念からの解放が獲得できるのか、換言すれば、「宗教は、罪を犯し、後年になって自責の念に苦しむ人間を救うことができるのか」という根源的な課題に対して、その答えを得るにはいたっていない。

親鸞も述べているように、人間は罪を犯さずには生きられない。ここから罪意識が芽生え、後になって、後悔や懺悔が生じ、自責の念に苦しむことになる。しかし、いくら信仰を深めても、宗教に、それを救う力は期待できないのではないだろうか。ましてや、それが過ぎ去った過去の出来事であれば、もはや、

特定の個人への償いの手段は残されておらず、一生、自責の念からの解放は期待できないものと考える。唯一、現世に生きるものにできることは、再び同じ過ちを犯さないという強い信念をもちながら、時代を超えた償いともいうべき、各種の社会参加を通して、決して偽善的な心をもたずに、少しは人のために役立っているという実感をもつことに、贖罪として、それなりの意義があるのではないだろうか。

（注）

（1）このテーマを選んだ理由

筆者は長年、電力会社の技術系サラリーマンとして、従事し、この間、競争社会に身を置くことを余儀なくされ、今から思えば、ずいぶん排他的で自己中心的なふるまいに明け暮れ、やさしさとおもいやりに欠けた傍若無人な生き方をしてきたものだとつくづく思い返される。このことが今のような安穏な生活の中で、時々、トラウマとなって、「晩年に強まる自責の念」ともいった良心の呵責に襲われることがある。決して長くない残された人生の中で、このような罪意識から少しでも解放され、安心立命の救いの境地に近づくには、どう生きるべきという課題からこのテーマに強く惹かれることになった。

丹羽文雄と浄土真宗（河合）

（2）歎異鈔

親鸞の弟子（唯円）が、親鸞滅後、異義異端の徒があらわれてきたのを歎き、聖人の言葉とともに、異説に対する正しい信仰を解きあかしたもの。「悪人正機説」（善人なおもて往生を遂ぐ。いはんや悪人をや）［自力作善の人は、偏へに他力をたのむ心かけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。他力をたのみたてまつる悪人、往生の正因なり］をはじめ、十八の語録がある。

（3）丹羽文雄文学全集第一巻（講談社　一九七四年　二六四頁参照、なお、以下に示した括弧内の現代語訳は、真継伸彦　『現代語訳　親鸞全集四』（法蔵館　昭和五八年　一三〇～一三二頁）に依拠した。この仏典は、語録第十三に相当するものであり、「何ごとも自分の意向でできることであれば、往生のために千人殺せと言われれば殺すであろう。しかし一人をも殺すことができる業縁がないゆえに殺さないのである。自分の心が善いから殺さないのではない。また殺さないと思おうとも、百人、千人を殺すこともあるのである…」と述べ、人間は業によって支配されていると主張している。

（4）丹羽文雄文学全集第十四巻（講談社　一九七四年　二五九頁参照）なお、括弧内の現代語訳は、真継伸彦　『現代

語訳　親鸞全集五』（法蔵館　昭和五七年　八～九頁）に依拠した。

この仏典は、語録第二に相当するものであり、「親鸞においては、ただ念仏だけで弥陀に助けていただけると、よきひと（法然）の仰せをいただいて信じているのみである。ほかにくわしく解き明かすべきことは何もない。念仏がまことに浄土に生まれる原因であるのか、それとも地獄に堕ちる業因であるのか、私はいっさい知らない。たとえ法然上人にだまされていて、念仏して地獄に堕ちたとしても、私はことさら後悔しないのである。その理由は、他の修行を勤めれば仏になることができたはずの者が、念仏して地獄に堕ちた場合にこそ、だまされてという後悔もありうる。私は念仏以外に、何の行もできない人間である。地獄こそふさわしい住処である。」と述べ、師法然に対する絶対信頼と念仏至上主義の考えを吐露している。

（5）丹羽文雄文学全集第二巻（講談社　一九七四年　三六三～三六五頁参照）なお、括弧内の現代語訳は、親鸞仏教センター　『現代語　歎異抄』（朝日新聞出版　二〇〇八年二九頁）に依拠した。

この仏典は、語録第一に相当するものであり、「人間の思慮を超えた阿弥陀の本願の大いなるはたらきにまるごと救われて、新しい生活を獲得できると自覚して、本願に従おうというこころが沸き起こるとき、迷い多きこの身のままに、阿弥陀の無限なる慈悲に包まれて、不動の精神的大地が与えられるのである。

阿弥陀の本願は、人間のいかなる条件によっても分け隔てや選びをしない。ただ、如来の本願に目覚めるこころひとつが肝心なのである。

なぜなら、生活状況に振り回されて、欲から抜け出せずに悩み苦しんでいる私たちをこそ救おうとする願いだからである。

そうであるから、本願の救いに目覚めるならば、どのような善であっても肝心ではなくなる。それは念仏がどのような善をも超えているからである。また、悪も救いを妨げると恐れることはない。なぜならば、阿弥陀の本願はどのような悪にも妨げられないからである」と述べ、人間生活のすべてを超越した阿弥陀の慈悲の絶大さを強調している。

〈参考文献〉

① 桐溪順忍『救済の論理』（一九八二　教育新潮社）一一〇～一一二頁参照

②　石井恭二『親鸞』（二〇〇三　河出書房新社）二四五～二五三頁参照

③　紅楳英顕『浄土真宗がわかる本』（一九九四　教育新潮社）七九～八六頁参照

④　亀井勝一郎「現代作家論」『文学界』（昭和二六～二九年）

⑤　中野恵海「丹羽文雄と親鸞　上　下」『相愛女子短期大学研究論集』（一九五六～一九五七）

⑥　大河内昭爾「丹羽文学の宗教性」『文学界』（二〇〇五）

⑦　藤井了諦「丹羽文雄の菩提樹について」『同朋国文』二〇号（昭和六三年三月二二日　同朋大学国文学会）

⑧　藤井了諦「罪・悪の意識とその構造について　前　後」『同朋大学論叢』五二号（昭和六〇年六月一日　同朋学会）

⑨　武田友寿「宗教の救済と文学の救済」『解釈と鑑賞』三九巻（一九七四年七月号）

⑩　村松定孝「丹羽文雄論」『明治大正文学研究』（昭和三三年一一月二五日　東京堂）

⑪　竹内義範・梅原猛『日本仏教とその思想の流れ』一三～一八頁参照『日本の仏典』（昭和四四年二月二五日　中央公論社）

（かわい・しげよし／皇學館大学大学院博士後期課程）